

作家の肖像

第8回

このコーナーでは、
毎回一人の作家を取り上げ、
美術評論家の酒井忠康先生に、
お話をうかがいます。



濱田庄司

1894-1978

はまだ・しょうじ
1894年神奈川県生まれ。陶芸家。
東京高等工業学校の窯業科を卒業後、京都陶磁器試験場に入所。
1920年バーナード・リーチとともに渡英。帰国後、栃木県の益子へ居を移し、以後活動の拠点とする。民藝運動を推進した中心的存在。61年には日本民藝館館長に就任。77年、益子参考館(現・濱田庄司記念益子参考館)を開館。84歳で死去。

不思議なギャップ

陶工・濱田庄司に会ったのは、今から30年以上前です。私が当時勤めていた美術館でお見かけしたのですが、その印象は鮮烈でした。

そのときの濱田は、英国仕立ての淡いベージュのスーツをピシッと着こなし、実に洒落ていました。また、お話好きで、あたりがぱっと明るくなるようなやわらかい空気を発していました。

一般的な彼のイメージというところ、「作務衣を着て、寡黙に轆轤を回す益子の陶工」というものかもしれません。しかし実際の濱田は、モダンなたたずまいをもつ、能弁な国際人。その不思議なギャップが、私に強い印象を残しました。

すばらしい鑑識眼

濱田は、東京高等工業学校(現・東京工業大学)窯業科を卒業後、同科の先輩である河井寛次郎(※1)が勤める京都陶磁器試験場に就職。そこで、河井と共に、釉薬の研究や轆轤の修技に邁進します。その後、英国のセント・アイヴスに渡り、親友であるバーナード・リーチ(※2)と、4年にわたり作陶を続けます。自然豊かな港町、セント・アイヴスに滞在し、濱田は田舎での生活に心惹かれたのでしょう。帰国後は、益子に住居と仕事を構えます。

私は時々、益子にある、濱田の自邸を改築してつくられた「益子参考館」へ行くのですが、そこには彼の作品だけでなく、彼がコレクションしていた工芸品も展示されており、目を奪われます。濱田は、柳宗悦(※3)、河井寛次郎らと「民藝運動」を

起こし、さまざまな国や地域の工芸品を収集しました。集められたものを見ると、すばらしい鑑識眼で、工芸品に対して愛情をもっていることが伝わってきます。それらをじっくりと見ていると、濱田自身の作品にも見えてくるから不思議です。

線が「動いている」

彼の作品に初めて出会ったときのこととも忘れられません。大胆に流掛が施された大皿を目にし、底知れない力を感じました。まるで、皿の上で線が動いているような、強いエネルギーがありました。

彼は柄杓に釉薬をすくい、大皿に向かって一気に15秒ほどで流し掛けます。それを見た人が「あまりにも早すぎて物足りなくはないか」と問うと、彼は「15秒プラス60年と見たらどうか」と答えたそうです。濱田は、自然に任せて作陶しているように見えますが、決してそうではありません。河井と釉薬の研究・調査を重ねたり、リーチと実験的に作品をつくったり、非常に研究熱心な人でした。その鍛錬のうえでの15秒なのです。濱田の作品を前にすると、そのことを感じずにはいられません。(談)

※1 河井寛次郎(1890-1966)
陶芸家。京都に窯を築き、独自の技法と作風をつくりあげ、近代陶芸の新境地を開いた。
※2 バーナード・リーチ(1887-1979)
陶芸家。香港生まれのイギリス人。東洋と英国の陶芸を融合した作品を残す。
※3 柳宗悦(1889-1961)
思想家。民衆的工芸の意から「民藝」という造語をつくり、日常道具にこそ美しさがあると唱えた。

酒井 忠康
さかいただやす
世田谷美術館館長、美術評論家。
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。
光村図書中学校「美術」代表著者。



上/青釉黒流掛鉢
益子 直径50.8×高さ11.3cm 1956年
濱田が得意とした「流掛」。見事な陶技と偶然性によって、躍動感あふれる線が生まれる。

左/塩釉押文花瓶
益子 直径19.0×高さ33.0cm 1955年
ドイツで始まったと言われる塩釉の技法を、濱田は日本でいち早く取り入れた。

中央/地掛鉄絵泰文茶碗
益子 直径12.0×高さ10.5cm 1955年
濱田がサトウキビ畑を見て描き出したと言われる「泰文」が施された茶碗。「泰文」は、彼が生涯愛した文様。

右/赤絵丸文急須
益子 直径13.5×高さ8.5cm 1938年
赤絵は、沖縄に滞在していた際、琉球赤絵に影響を受け、好んで使っていた技法。

(すべて日本民藝館蔵)